

現代読書灯



政権交代とは何だったのか 山口二郎著(岩波新書 840円)

いま、「政治の質」を変える 辻元清美著(岩波書店 1785円)

ヒューマニティーズ 政治学 刈部直著(岩波書店 1365円)

政治・思想



杉田 敦

2009年の政権交代は、政策課題をめぐって政党が競い合う本格的な民主政治の開始を予感させた。しかし、一時の期待も今は冷め、「決められない政治」への不満が社会を覆っている。政権交代のある政治実現を目指し、政治改革論を主導してきた一人である山口二郎は、失敗の背後に政治改革論の欠陥があったと認める。「政権交代とは何だったのか」。政治改革論議では、政治によって具体的

民主党政権の立ち往生 役者そろわぬ現実直面

「何を」、すなわちどういつい政治を実現すべきかは棚上げされ、「誰が」、すなわち官僚と政治家のいずれが政治を主導するかといった、統治形式のみが問題にされた。政策論議がなかったから、民主党が内部対立を隠したまま「方便政党」をつくることもできたわけであるが、その馬脚は政権獲得後にすべあらわれた、といつのである。政治主導の名の下に、官僚からただ権力を奪えばいいかのよう

に「何を」、すなわちどういつい政治を実現すべきかは棚上げされ、「誰が」、すなわち官僚と政治家のいずれが政治を主導するかといった、統治形式のみが問題にされた。政策論議がなかったから、民主党が内部対立を隠したまま「方便政党」をつくることもできたわけであるが、その馬脚は政権獲得後にすべあらわれた、といつのである。政治主導の名の下に、官僚からただ権力を奪えばいいかのよう

に「何を」、すなわちどういつい政治を実現すべきかは棚上げされ、「誰が」、すなわち官僚と政治家のいずれが政治を主導するかといった、統治形式のみが問題にされた。政策論議がなかったから、民主党が内部対立を隠したまま「方便政党」をつくることもできたわけであるが、その馬脚は政権獲得後にすべあらわれた、といつのである。政治主導の名の下に、官僚からただ権力を奪えばいいかのよう

このは、ステージの幕があがる時には大半終わっている「という自民党政治家の言葉を引きつつ、辻元は、政治的なスキル的重要さを強調する。自ら認める通り、小泉元首相に「ソーリ、ソーリ」と食いついていたところは様変わりだ。「政治とは悪さ比べ」とも辻元はいうが、政治学者丸山眞男が好んで引いた悪き加減の選択(「福沢諭吉」を想起させる。刈部直は「ヒューマニティーズ 政治学」で、その丸山と、保守派の論客であった福田恒存が六〇年安保等をめぐって行ったやりとりになられている。一般の人びとは自己利益しか考えてなく、政治に理念を持ち込むのは「偽善」とした福田に対して、「政治が『高度の演技の世界』である以上、それは偽善と実は切り離せない」と論じた丸山に刈部は注目する。刈部自身、この本で政治というものがもつ不気味さ、どんなに立派な理想であっても、それを政治という迂回路を用いて実現しようとしたと勝手に「汚れた世界」に引き込まれかねないことへの不安を描いている。しかし、それでもなお、さまざまな利害を調整し、現実を少しでも理念の方に向けて行くためには、演技能力が必要だというのが、舞台はできてても役者がそろわない。それが私たちの政治の現実ではないか。